14.5-139
1200501214603
14.5
139

東京帝室博物館講演集 第五冊

歐洲學者の東方探檢　濱田耕一

東洋最古代の女人畫に就て　松本亦太郎

始

14.5
139

東京帝室博物館講演集

第五册

歐洲學者の東方探檢　文學博士　瀧　精一

東洋最古代の女人畫に就て　文學博士　松本亦太郎

東京帝室博物館

講演集

第五册

昭和五・三・一〇 寄贈

發行所寄贈本

本冊は大正十五年十一月七日東京美術學校講堂に於て開催の本館講演會に於ける瀧松本兩氏の講演速記錄なり

14.5-139

目次

歐洲學者の東方探檢……文學博士　瀧　精一
東洋最古代の女人畫に就て……文學博士　松本亦太郎

歐洲學者の東方探檢

文學博士　瀧　精一

帝室博物館藏

(一)

唯今帝室博物館の表慶館に於て中央亞細亞で近年發見され英佛獨の三箇國へ持行かれた古畫の摹本が陳列されて居る。卽ちその陳列に聯關して本日の此講演會が開かれた譯であるが、今ま陳列されてゐる摹本は帝室博物館と東京京都兩大學のものであつて、私もその摹本の出來た事に聊か關係を持つと云ふ事からして、此演壇に立つて何にか話をするやうに命ぜられた。然るに私はその前にかの摹本が如何にして出來たかに就て一言申述べる。かの摹本は後刻講演をなされる京都大學の美術史を擔當になつて居る澤村專太郎君の御盡力に依て、東京美術學校の出身畫家長谷川路可君の寫されたものである。澤村君は大正十三年より歐羅巴へ留學されて、豫てより歐羅巴に在る中央亞細亞から出た古畫の摹本を作つて、日本へ持歸りたひと云ふ希望を持つて居られたのであつた所、丁度長谷川君がその頃歐羅巴に居られて、長谷川君が東洋古畫を摹寫する事の上手である事は澤村君の夙に熟知する所であつたから、幸なりとして澤村君は長谷川君に交

渉してその仕事を始める事になつたのである。然るにその仕事を實行するには相當の資金を要するのであるが、恰かもその時に東京大學の松本亦太郎博士が歐州へ出張されて松本教授が澤村君の話を聽かれて大いに賛成して、歸朝の上盡力をされその結果東京大學と帝室博物館と京都大學と三箇所から出資してその事業を進める事になつて、遂に此度陳列されただけのものが出來たのである。

即ちかの摹本の原本はロンドンのブリチッシ、ミユージアムにあるスタイン氏が燉煌千佛洞から齎らし來つたものと、巴里のルーブルのミユゼー及びギメーのミユゼーにあるペリオ氏が是れも矢張り燉煌千佛洞から持ち來つたものと、並に伯林のフエルケルクンデ、ムゼウムにあるグリユンウエーデル、ルコック兩氏が庫車、吐魯番その他の地方から持來つたものであつて、勿論それ等將來品の全部ではない。その中の最も參考となるものを選擇して寫されたのであつて、その選擇は澤村君がなされたのである。その摹寫を作るに就ては畫家長谷川路可君の熱心なる努力と澤村君の盡力とは非常なものであつて、摹本の出來榮の善い事は原本を實見した人々の悉く承認する所であらうと思ふ。夫故に此摹本が出來たと云ふ事はどれ程我學界藝術界に利益を與へるか判らんのである。是に就て私共は長谷川澤村の兩君に對して十分感謝の意を表しなければならん。

尙ほ序ながら申述べて置くが、以前東京大學にはスタイン氏が燉煌の千佛洞から持來つた畫の中を二十點だけ摹寫したものを所藏してゐたのである。それは大正九年に財團法人啓明會に私から御依賴をして、同會の出資を以て永田春水井上白揚の二君に英國へ出張して頂いて摹寫を作つたのであつて、啓明會から東京大學へ寄附されたのである。然るにその摹本は大正十二年の震災で大學が燒けた時に惜い哉燒いて了つたのである。唯その又寫しが今も東京美術學校に保存されてゐる。然るに今回の長谷川君の寫されたのは今申した啓明會の摹本とは異ふ。けれども或ものは全く同じである、況んや又今度は其時のにないものを數多く寫されてゐるのである。夫故に今回の摹寫に依て先き に燒失したものゝ取り還しも附いたやうな結果になるのである。此事は序ながら特に申して置く。先づ最初に是丈の事を申述べて置いて、是から私の話の本論に移るのであるが、私は「歐州學者の東方探檢」と云ふ題下に於て歐羅巴の學者が近年行つた東方探檢の中で、我々に格段の興味あるものゝ概略を話しして見やうと思ふのである。

(二)

十九世紀の末よりして歐羅巴人の東方探檢をなしたものは隨分多くの數であつて、何れも學界に貢献して居る。近東より印度阿富汗尼斯坦の方面に亘つての探檢にも勿論有用なものがあるけれども、我々に對して殊に興味あるものは北支那蒙古から新疆甘肅の地方に於ける探檢である。是等の地方に於ける探檢の目的たるや必ずしも一樣では

ない。地理學地質學上の探檢を主なる目的とするものは甚だ多いのであつて、ヘディン氏の踏査の如きはその方で特に有名である。又最近行はれた米國人アンドリウス氏の行つたのは甚だ大規模の著るしいものであるが、是は古生物學の方の調査を主なる目的として居る。然るに又一方に於て考古學藝術史學其他一般人文學の上に夥多重要の研究資料を齎らし來つたものがある。それが特に我々に大切であるが、その中でも一番有力なのは英國のスタイン氏の新彊及び甘肅の二省に於て行つたものであらうと思ふ。

スタイン氏は一九〇〇年から始めて前後三回に亘つて新彊甘肅の探檢を行つて、足跡の及ぶ所も甚だ廣く、將來品の數も夥しいもので他の探檢者の及ばざるものがある。スタイン氏の探檢した新彊甘肅に於ける主なる場所は昔の干闐國である和闐、昔の龜茲國である庫車、昔の高昌國である吐魯番、それから樓蘭、燉煌玉門關の遺跡等であつて、何れもそれ等の土地から多くの品物を持歸つて來たのであるが、第二回の探檢に際して燉煌の莫高窟卽ち千佛洞の埋れてゐた文庫の中から持ち歸つた品が莫大の數である。文書が數千卷繪畫が數百點其他雜品も尠からずあるのである。

スタイン氏は如何にしてそれを得るに至つたかと云ふに、卽ち氏は一九〇七年の三月始めて此燉煌の千佛洞に到着して、その洞窟を見て先づ壁畫や彫刻の盛なるに驚いた。然るに是より先き氏は其處に古文書を澤山に貯藏してゐる古い文庫があつて、それが久しく埋沒されて居たのを寺守の道士が近年發見した事の噂を聞いてゐた。故に氏は道士に交渉してその隱れたる文庫を見せて貰つた。それを見せて貰ふまでに大分の苦心をしてゐると云ふのは、此文庫が始めて發見された時に道士は此事を甘肅の官憲に報告した所が、それは元のまゝにして置いて開くなと云ふ命令であつたからである。けれどもスタイン氏は種々道士を說いて遂に見せて貰つた。さて此隱れたる文庫が如何にして發見されたかと云ふと、それはその時より數年前偶ま一洞窟の修繕を行つた時に一方の壁際に積まれて居た土を取り除けて見ると其處に穴があつて、その穴を通じて一つの室があつて多くの文書を貯藏してゐる事を發見したのである。そこでスタイン氏が道士に導かれて始めてその文庫に這入つて見た時には、書類が殆ど十フイート位の高さに山の如く積まれてあつて、その容積を測ると五百立方フイートもあつたと云ふ。その書類には漢文の文書もあり、梵文の文書もあり、ウイーグル、吐蕃或は未だ誰れも讀む事の出來ない西藏語の文書もあつた。それ等の文書の半數以上は佛教の經典で、他は漢文學又は言語學の資料となるものである。而して文書の外に又繪畫や織物やその他の美術的の品物が澤山にあつた。スタイン氏はそれを見て且つ驚き且つ喜んで種々苦心慘憺して道士に掛合つてその一部を讓り受けた。その代金は五千五百ルピーと云ふから、當時の日本の金にしたならば凡そ四千圓足らずのものである。それを荷造した時に文書が二

十四箱繪畫その他が五箱となつて、それ等は幸に倫敦の博物館まで無事運送された。

それでその品物の年代に就ては、先づ古くは六朝のものから隋唐のものが可なりあつて極く新らしいのが宋の始のものである。想ふにその千佛洞の文庫は古い時代に故意に閉されたもので、何故にそれを閉しかと云へば昔その土地を吐蕃卽ち西藏人が酷く荒らしたものであつて、その害を防ぐ爲めに此文庫を態々埋沒せしめた、それを今ま云ふ如く二十世紀の初年に偶然發見したのである。然らばその之を閉したのは何時かと云へば恐らく十世紀の終か十一世紀の始より古くはない譯である。そうすればその年代の上から考へても十一世紀初年以後の品物はその文庫には這入つてゐなかつた譯である。卽ち極く新らしいもので宋朝の初年となる。今回陳列された所の摹本に燉煌出となつてゐるものは皆な何れも千佛洞の此の文庫から出た畫である。

スタイン氏の今日迄の探檢に於ける最も著るしい發見は何と云つても此千佛洞の文庫であつたと思ふが、その他の發見では和闐地方にも珍らしいものがあり、又ミランの地で發見した壁畫なども殊に珍らしいものであるが、更に注意すべきは樓蘭の舊地に於て漢時代の文書又は器物を得た事である。第二回の時に發見した漢時代の文書に就ては佛國のシャバンヌ氏の調べた詳しい報告書も既に出でゝてゐて、世の中にも弘く知られてゐるが、それは前漢又は後漢時代のもので、明かに年號を書したものもあつて多數は木簡に墨書したものである。が又その外に純白な絹帛に書いた文書があつて、それは書も甚だ見事なものである。從來は漢時代の書と云へば金石に傳はるものしか誰れも見てゐなかつたのに、斯く木簡又は絹帛に墨書したものを實見する事は眞に珍らしいと云はなければならぬ。尙ほその外にも第三回の探檢に於て文書以外のもので漢時代のものをスタイン氏は得てゐる。併しその事に就ては話の都合上後段に述べる事にする。

（三）

次に佛蘭西で中央亞細亞を探檢して多くの人文學上の資料を得たのは誰れかと云へばペリオ氏であつて、ペリオ氏は一九〇六年から同八年に亘つて中央亞細亞を探檢し、氏の將來品もスタイン氏のと同樣に燉煌の千佛洞出のものが多數を占めてゐる、その外のものもありはするが、あまり多くの分量ではない。ペリオ氏は丁度スタイン氏が行つた少し後に千佛洞へ行つたのであつて先きにスタイン氏が千佛洞の埋もれた文庫の中の文書古畫等を寺守の道士に交渉して買ひ求めたその殘りがまだ可なり澤山あつた。その中からペリオ氏が選び出して古文書古畫等を買求めて持ち歸つたのである。文書は是れ亦數千點に上り、佛教史漢文學の資料として珍らしいものが多々ある。その文書の中に交つてゐる唐の太宗皇帝の書である所の溫泉銘の拓本の如きは唐拓の優物であつて、是などは歐羅巴の人にはあまり興味があるまいが、我々に取つては殊に珍品である。

繪畫は全體で數十點でそれはスタイン氏の將來したものには及ばないが、併し又珍らしいものもあつて、今度の幕本の中にもその中から寫されたものが幾つかある。

次は獨逸であるが、獨逸では主もにグリユンウエーデル氏並にルコツク氏に依つて中央亞細亞の探檢が行はれ、グリユンウエーデル氏は一九〇二年以來兩度新疆省に入つて探檢をなし、イヂクシャリイ、庫車、吐魯蕃、カラシャール地方に於て發掘を行つた。又ルコツク氏は千九〇五年以來是も亦二回に亘つて新疆へ行きグ氏の歩いた地方その他を調査した。將來品はルコツク氏の手に依るものが殊に多く、それには文書もあり裂や紙に畫いた古畫もあるが、特に古壁畫の大きいものを持ち來つたのは大なる功績である。それ等の一部の幕寫が今度の陳列の中にもある。併し此獨逸の探檢に關しては後刻澤村君から御話があると思ふから私は詳しくは述べない。

それから次は魯西亞であるが、魯西亞の學者が行つた探檢に亦却々有益なものがある。魯西亞で今迄に東方探檢をやつて重要の結果を齎らし人文學上の品物を多く將來したのは、オルデンブルグ及びコツロフの二氏である。オルデンブルグ氏は一九〇九年から一九一〇年に亘つて中亞へ行つてカラシャル、吐魯蕃、庫車の三地方を調査した。それ等地方に於て古寺院の舊趾を調査してその精しいプランを寫して來たり、又は珍らしい寫眞を取つて來たりする事に於て他の探檢者の未だなさざる事をなしてゐる、又將來品にも却々侮りがたいものがある。コヅロフ氏は一九〇九年からその翌年に亘つて甘肅のカラホトを探檢した。カラホトは昔の西夏の都城であつて、その古寺院の廢趾は何れも吐蕃式のもので、其處から出る文書は漢文のものもあるが西夏語のが多い。又文書にしても繪畫にしても年代は恐らく宋末から元初の間に亘るものと思はれる。即ち年代に於ては他の發掘品よりは新らしいのであるが、併し新疆の諸地方や燉煌あたりで發掘したものと接續せしめて見ると、是れ亦甚だ有益である。私は大正二年革命前に露都へ遊んだ時に兩氏の將來品を見た。コヅロフ氏のカラホトから將來した繪畫は二百三十餘種あつてアレキサンドル三世博物館に置かれてあつたが、却々珍品に富んでゐる。

（四）

以上私の述べたのは何れも今から十數年前の探檢であつて、それ等は既に世の中へも弘く知れ渡つてゐるものなのである。然るに近年になつて更に又新らしく行はれたものがある。その最近行はれたものには特に年代の古くして珍らしい品物が多々發見されてゐる。從前の探檢に比べて甚だ古いものを發見してゐるものが多いのである。それに就て今ま大要を語ると、先つその一はスウエーデンの地質學者で支那政府の顧問なるアンデルソン氏が一九一九年以來北支那及び甘肅省に於て行つた探檢である。此探檢は先般來朝されたスエーデンの皇太子殿下の後援を以て行はれた。アンデルソン

氏は河南省の澠池縣仰韶村に於て發掘をなして其地で得た上代品の中に珍らしいものがあつた。その中に色文樣のある燒物がある。それが殊に問題となるものでアンデルソン氏はその製作、文樣等から考へて、それが石器時代から銅器時代へ移り行く中間の時代のものと考へて、而してそれが魯西亞トルキスタン地方、地中海東部、及近東(シシリイ、テッサリイ、トリポルジエ、スサ、アナウ等)から出る同類の品と性質を同うするものと見るのであつて、それに依つて一面には支那の古銅器の形式の起源を考へる事も出來、又上代の支那の文化と西方文化との間に關係を見出すことが出來ると考へるのである。尙ほアンデルソン氏は河南を探査した後に更に甘肅省の探査を行つた。一九二三年以來一昨年まで甘肅の大半を跋渉し諸方の古墳を發堀して、矢張り仰韶村から出たと同じやうな燒物を多々得てゐる。それ等も要するに石器時代末期の品物であつて、而してそれに於て河南のものよりも更に一層西の方の品物との類似点を見出すと云ふのである。

是の如き品物が發見された結果として、遂に支那の文化の起源が或は支那のみで起つたのではないとの疑ひが生じやうとするのである。曾てリヒトホーフエン氏は支那民族が西の方ら移住し來つたものではないかとの假定說を出した事がある、それは久しく忘れられてゐたが、今や又それが蘇らしめられるのではないかとまで考へる論者をも出さんとする形勢を生じてゐる。併しそう云ふ事まで論定しやうとするには更に多くの新らしい證據を必要とするのであつて、アンデルソン氏の今日迄の發見では未た決して十分であると云へまい。併し何れにしても同氏の發見した品物には甚た貴重なものゝある事は疑ないので、日本では既に鳥居博士が蒙古地方の探査を行つて、上代のものゝ發見をなす上に可なりの成績を擧げてゐる。今ま又アンデルソン氏が是の如く廣く探査して上代支那文化の研究資料を得た功績は容易ならぬものがある。

次はスタイン氏の漢時代の器物の發見である。前にも述べた如くスタイン氏は第二回の探檢の時に樓蘭の遺趾に於て漢時代の木簡及び絲帛に書いた墨書の文書を勘からず得てゐる。それ等のものゝ貴重なるは今更云ふ迄もないが併しその時の收獲で漢時代に屬するものは主もに文書であつた。所が氏は第三回の探檢中一九一四年に於て再び樓蘭の古地に在る古墳から矢張り漢時代の種々なる品物を得た。是に就てはスタイン氏は今迄にその概略を報告するのみでまだ詳細な報告はしてゐない。詳しい報告は近日出版されるInnermost Asiaと云ふ書物の中に書かれる筈である。第二回の探檢の報告はSerindiaと名けて出版してゐるが、今度のInnermost Asiaはそれに續く所の報告である。何れ詳しい事はその書物に出るであちうが要するに此古墳の發堀に依て得たものには人骨もあり、本棺もあり、鑑錢、皿壺或は種々なる明器があつたが、又織物刺繡の裂があつたのである。就中その織物が人の目を驚かすに足るのである。それは現今ブリチッシ、ミュ

ージアムに陳列されてあるが、率ね雲紋に靈獸を配した甚た面白い文様を五彩の糸で織つたもので、その繪の間に篆文の文字を配してゐる、その文句は漢鏡に見る所のものと似てゐる。而してその織方の精巧なる實に驚くべきである。蓋し此古墳の發掘品には年代を明示する銘文のあるものは一つも出なかつたやうである。その點に於ては朝鮮樂琅の古墳の發掘品とは異ふ。あれには年代を記したものがあるがこれはそうではない。夫故にその年代を定めるには特に考証を要する譯であつて、スタイン氏はその土地の繁榮期が何時であつたかを考へ、發掘品の性質からも推して種々と考証してゐるが、要するにそれの漢時代に屬する事は何等疑の餘地はあるまいと考へる。

此スタイン氏の第三回の發見は可なり注目すべきものであるが、茲に又もう一つ最も新らしい探檢として著るしいものがある。それは魯西亞のコヅロフ氏が一昨年から昨年にかけて北蒙古に於て行つたものである。コヅロフ氏の往年の甘肅省カラホトに於ける發見は、あれは割合新しい時代のものであつたが、今度のはそれと異つて甚た古いものである。コヅロフ氏の此探檢に依て發掘したのは北蒙古の一部セレンガ河の上流に在る古墳であつた。其處は古の匈奴の土地である。その古墳から出た品物には黃金の裝飾具、銅器、玉器、陶器、漆器、刺繍織物その他があるが、殊に珍らしいのは刺繍と織物とである。その刺繍の幾つかある中で誠に緻密な技術を以てした驚くべき精巧なものがある。

織物は或はスタイン氏の樓蘭で發掘し得たものに似たものもあるが、又或は風景を織出した頗る奇技なものがあつたりする。而して此發掘品の性質は純支那式と認むべきものがあるかと思ふと、又甚たしく西の方の様式を示してゐるものがある。刺繍の精巧なるものゝ如きには明かにそれがある。それには明白なる希臘文様が見えてゐる、勿論波斯感化と認むべきものもある。それで是等の品物に就ての魯國學者の研究も追々と發表されるであらうが、それ等の品物の年代に就ては恐らく紀元前第一紀卽ち前漢武帝以後前漢末迄のものならんと云はれてゐる。但し是發掘品に於ても年代を明示する銘文はないが、唯漆器の一つそれは樂琅の古墳から出たものゝやうに矢張り黑地に赤く渦卷文を交へた線形の文様を現はしたものがあつて、その器の底に「上林」と云ふ二字がある。その二字が蓋し時代を定める上の一の材料となるものかも知れない。その他にはどうも銘文はなさそうであるが、併しそれにも拘らずその發掘品がすべて漢時代のものである事は實物上の比較を以ても明で、或は六朝頃のものならんと考へた學者もあると云ふが、その誤なる事は勿論で、その品は蓋し古の匈奴に屬するものではなからうかと思ふ。卽ち此コヅロフ氏最近の發掘も亦眞に有益なものと云はなければならぬ。

漢時代の器物の發掘に就ては、朝鮮の樂琅の古墳のそれが甚た著るしいものである事は今更云ふ迄もない。先きには關野博士がその發掘をなし又昨年は原田文學士が發掘

して、種々珍らしいものを得てゐる。卽ちその金屬器漆器等に殊に珍らしいものがある。又昨年の發掘に於て得た漆器に描いた彩色の人物と動物との繪の如きは今迄に全く類のないものである。それ等の貴重なる事は論する迄もないのであるが、唯併ながら織物繡物の類に至るとそれはスタイン氏が樓蘭で得たもの及び最近のコヅロフ氏の北蒙古で得たものゝ如きはあまり他に類がないと思ふ。是等の品物は今迄中央亞細亞で得た他の品物に比べても類を殊にして居る。それでかやうに一方に於て我朝鮮樂浪の遺物が發見され又一方新疆甘肅蒙古北支那に於て歐羅巴の學者が意外に古い時代の品物を發見するに至つたのであつて、それ等のものを併せて研究する時に於て茲に我々は東洋文化の起原に關する考究を益々進め行く事が出來るのである。支那の上代の文明殊に漢時代の文明は之を文獻の上から考へて頗る燦爛たるものがあつたに相違ないと我々は承知してゐたのであるが、事實かく迄工藝の進歩があつたとは思はなかつたのである。我々もその意外なる盛況に驚くのであるが、歐羅巴の人に取つてそれが一つの大なる驚異である事は勿論である。

(五)

歐羅巴の學者の近年行つた東方探檢の主要なるものに就ての概略を語れば右の通であるが、尙ほ私は斯の如き探檢の結果が歐羅巴人間に如何なる影響を與へたかと云ふ事を少しく述べて置きたいと思ふ。歐羅巴の人は是等探檢の結果を見て東洋文化の根低の古くして且つ深い事に驚いて、そこで益々東洋の研究を進めて行かねばならんと考へるに至つたのである。私は本年久振で歐羅巴へ遊び歐羅巴諸國に於ける東洋研究熱の最近甚たしく高まり來つた事を實見して、寧ろ驚いたのである。現今東洋研究の歐州に於て盛なる事は種々の事柄からして判かる。諸國の大學に東洋學に關する講座を多く設けてゐる事でも判かる。又東洋學の講座でなくても、大學の講義に於て一般に東洋の例を引いて議論するものが非常に多くなつてゐる事でも判かる。殊に伯林などでは東洋學又は東洋藝術を研究する爲めの學會が設けられたりしてゐる。實は獨逸のみではない、他の國でも段々とそう云ふやうなものを設けやうとする氣運か見えてゐる。巴里の書林では今や日本東洋に關する事を書いた書物ならば何んでも賣れると迄云つてゐるものがある。

事茲に至つたに就ては種々原因があるであらう。一つには歐羅巴文明の發達が行詰つた爲めでもある。歐羅巴文明の行詰つた極遂に東洋に學ふ所のあらんとするのは當然の事である。けれども歐羅巴の人が東洋を學ばんとするやうになつたのは東洋の文化が眞實價値あるものたるを認めるに至つたからでなければならぬ。西洋の人が我浮世繪の版畫を賞美したり、根付彫刻を喜んだり、乃至は支那の陶磁器を愛したりするのは

久しい前からの事ではあるけれども、從來彼等がそれ等の品を愛賞したのは主もに好奇心から來たのである。それ等の東洋品は西洋に於てはCuriosとして取扱はれた。然るに今日に至つては西洋の人は好奇心のみを以て東洋の物を喜ふのではない。眞に東洋の物の價値ある事を思ふに至つた結果それを研究しやうとするのである。以前は東洋研究と云つても語學を研究するとか地理を研究するとか云ふ事の方が多かつたのであるが、今日ではそうでなく東洋の人文殊にその宗教哲學文學藝術を眞面目に研究してその眞相を究めやうとするものが多くなつて來たのである。

然るに左樣に西洋の人が東洋の文明の價値を認めてそれを眞面目に研究しやうとするに至つたに就ては、近年の東方探檢の結果が亦大なる影響をなしてゐる事は勿論である。支那新疆甘肅その他地方の探檢の結果は歐羅巴人をして眼のあたり東洋文明の古くから有力なる根抵を有するものたるを思ばしめない譯にゆかなかつたのである。然るにそれは東洋と云つても實は支那のものゝ新らしい發見が原因をなして、その研究を盛ならしむるに至つたのである。故に現今の彼等の東洋研究は支那に偏してゐる、日本が往々にして閑却されるやうな事もないではない。それは誠に據ない次第である。併し何れにしても歐羅巴人の東洋に對する憧憬は甚たしいものがあつて、彼等の東洋物に對するや今迄は主もに探檢の時代であつたのであるが、是からは更に進んで眞箇の研究をなす時代に這入るのである。探檢時代から進んで更に眞の研究時代に入らんとしてゐるのである。

歐羅巴が既にそうである、東洋研究を眞面目にやらうとする時であるからして、それに依て我々日本人が顧みて考慮しなければならん事も多々あらうと思はれる。我々東洋人は或は西洋の人に促されて始めて自分の持つてゐる寶物の價値を知るやうな事もありはしまいかと思ふのである。併し此際歐羅巴人が東洋研究の指導者として仰くべきものは日本人であらねばならぬ。我々日本人は彼等の爲めの指導者たる任務を自然に備へてゐるのである。歐羅巴の人が如何に近年の探檢に依て新らしい發見をなし、新らしい資料を得てゐるとは云へ、我々日本人の指導がなくては深く立入つて學問的研究をなす事は困難な場合が多からうと思ふ。そう云ふ譯で歐羅巴の人が將來我々に期待する所は益々多くなる譯であるが、又我々が是方から進んで彼等歐羅巴人と研究の上に於ける協力を求めるの必要も大いにある。探檢の事業も若し出來得べくんば協力してやりたいのである。そうすれば効果が餘計に擧る譯である。假令そう云ふ事は出來ない迄も我と彼との研究資料を互に提供し合つて研究の便宜を計る位な事は是非やらなければいけない。今回の澤村君の盡力されて長谷川君の作られた中亞發見の古畫の摹本の如きは殊に貴重なるものであつて、斯の如きものが日本に得られた事を我々は大いに

慶賀し、且つ將來又是の如きものゝ更に多く得られる事を希望するのである。而して今や我々は長谷川君澤村君の盡力を感謝すると同時に又その摹寫をなす事を許された外國の探檢家及び博物館に關係の諸君の好意に對しても十分の敬意を表する次第である。尙ほ今後是の如き仕事に於ては彼方も便宜を與へて吳れる代りに又是方も向へ對して十分便宜を與へるやうにして、益々國際的に事の進行し行く事を私共は切望して止まない次第である。（大正十五年）

東洋最古代の女人畫に就て

文學博士　松本亦太郎

表慶館に於ける此度の模本の展觀の中に女人畫で中々優秀なものがあります。キジール發見の壁畫の舞女の圖は印度系のもので肉身を立方體的に描く爲め種々工夫がしてあり、支那系の繪とは頗る趣が異つてゐます。法隆寺の壁畫の畫風と聯關せしむる事が出來るかと思はれます。又引路菩薩が唐時代の高貴の婦人を導いて極樂に行くところの、あの二枚の圖の如きは實に立派なものであります。更に正倉院の樹下美人圖と略同じであるところの女人の風俗畫の斷片が、模寫されてありますが、あれも實に美しいものでありまして、私はブリティッシュ・ミュージアムであの原圖を見たのでありますが、色と云ひ形と云ひ又風俗畫として研究的價値の大なるものであります。其他佛陀を供養する施主の中に色々な婦人の姿があります。花嫁姿なども畫いてありますが其時代の風俗を見る上に一種の興味があります。其他觀音菩薩或は引路菩薩の如きも女人姿に畫いてありまして、此女人の姿と云ふものが藝術上の對象とし或は宗教的崇拜の對象としまして、余程重要な意味を有して居るものであると云ふことを知ることが出來るのであります

す。是は日本の古い佛畫などを見ましてもさう云ふ感じを起すのであります女人姿が出て來ると、何となく其處に菩薩部の慈愛に富んだ溫かみのある心持が現れて來るのでありまして、我々の興味を惹くのであります。それで繪畫と云ふものを考へる時に女人の姿に聯關して考察をして見ると色々面白い點があるかと思ふのであります。

先づ古いところに遡つて此女人姿と云ふものを尋ねて見るとどの位のところまで行けるものであらうか、此問題は一方に於て線で畫いてあるところの繪畫の源流に關する問題にもなつてゐます。燉煌や或は中央亞細亞の方から出た繪は描線が主になりましてそれに色彩が加へてある。其線畫と云ふものを段々遡つて考察をして行くと、どの位古いところまで達することが出來るであらうか、淵源が何處にあるであらうかと云ふやうな好奇心が起つて來るのであります。

支那では、唐の時代より遡つて女人畫としての遺品は、矢張り顧愷之の畫いたものでありませう。プリティッシュ・ミュージアムにあります女史司箴の圖は或は後世の模寫であるかも知れませぬが、兎に角顧愷之の畫風が傳へられてある。顧愷之の畫いたもので遺つて居るものは不思議に女人畫のみであります、洛神賦圖も矢張り女神を畫いたのであります。それから宋の時代に翻刻になり、又清朝になつて再刻しました烈女傳のあの繪解は矢張り女のことを畫いたものでありまして、顧愷之の畫いたもので女人畫だけが遺品となつて後世に傳はつて居る、是は西洋の紀元で申しまして紀元後三百六十四五年を中心として出たところの品物であります。でそれより遡つて女人畫と云ふものの古いものは畫として殘つて居るものはどうも支那にはないやうであります。漢の彩畫缸には女人を頗る高品なる姿に描いたものが見出されます。又漢の畫像石の中には女の舞ふ姿、車に乘れる姿などがあります、それから廚で料理をして居る中に矢張り婦人姿のものがあります、あれが紀元以後百二三十年あたり或は百三十年前後の作品であるかと思はれる。それから先に支那で女人畫を尋ねやうとしましても遺品はどうももうないのではないか。銅器の文樣などを探しましたら、中に或は女人の姿が出て來るかも知れませぬが、是は問題が少しく別になりますので、西洋の紀元の初頃より以前に遡つて女人畫と云ふものを支那に於て見出すと云ふことは、遺品の上からは先づ今日では一寸むづかしいであらうと思ふ。

それから先に遡ると云ふことになりますと埃及でなければならぬ。印度に行つてもない。印度で繪として遺つて居る女人畫は紀元後五六世紀のものが主であります、或は極く早いものは紀元第一世紀あたりのものがあるかも知れぬ。波斯の方にもさう古いものはありませぬ。女人畫の畫いてあるものは十二三世紀以後の縮小畫の中にはありますが、紀元前のものは繪として出て來るものは波斯にもないのであります。さうしま

すと云ふと段々西の方に行きまして埃及に這入らなければならないで東洋に於て女の姿を畫いた最も古い繪畫で今日に殘つて居るのは埃及の繪畫であらうと思ふのであります。今日の瀧澤村兩先生の御話は東洋の東の方の端に於ける歐羅巴の學者の探檢の結果に就てでありますが、東洋の極く西の端に於て歐羅巴の學者並に最近には米國の學者が探檢研究を致しまして繪畫に就て色々新しいことが分つて來て居るのであります、そこで私の今日御話申上げるのは、東洋の西端卽埃及に於ける歐米の學者の研究の結果の中から女人に關する繪畫の遺品に就て御話を致し同時に線畫の源流に遡つて考察をしやうと思ふのであります。

埃及には極く淺い石刻畫或は淺い浮彫の形式で女の姿を表現したものがありまして、それらの中には繪畫の遺品よりも一層古いものがあるのであります。此石刻畫或は浮彫と云ふものは線畫を下繪として拵へるものでありまして、其下繪は畫師が畫くのであります。埃及の畫師と云ふものは石刻畫或は浮彫の下繪を畫くのが其主なる仕事でありまして、獨立に繪を畫いたのではないのであります。それらの石刻畫や浮彫は一方に於て宗教上の考から其繪の內容もそれから構圖等も決められて來たのであります。それから又他の方では此石刻に適するやうに……石に線を刻んで行くのに適するやうに其手法が制限されたのであります。尤もそれらの圖の中には、主題になつて居る人物が

現世に居りました時の職務であるとか或は其人に關する事變卽ち風俗を畫く部分もありまして、人物の色々活動して居るところや、又其活動に聯關して居る獵獸……狩の時に取る獸……それから家畜或は水草……主にバビロスでありますが……船なども畫かれますので、畫師が實物を觀察して之を描線に表現する工夫を隨分して居るのであります。併しながら初は宗教的の意義を有つやうに石刻にするのが目的でありましたのですから手法が自由自在であると云ふことが出來ないのであります。後になりましてから宗教上の考が少し變つて參りまして、さう云ふやうなことを現すのに必ずしも石刻にする必要がない、石のやうな永久的の材料に刻んで置かなくも宜いと云ふやうな考へ方をするやうになつて參りまして、石壁の面に繪を畫き或は漆喰の面に繪を畫き、それから板の面に繪を畫いても宜いと云ふことになつて參りまして、石刻或は浮彫と云ふことから畫師が解放されたのでありますが、兎に角長い星霜の間束縛されて居りました爲に、物の見方なり描き方なりが型に嵌まりまして、想像を新にする或は手法を新にすると云ふ創始力が埃及の畫師には出て來なかつたのであります。そこで傳統的の手法に從つて何時も製作をすると云ふことになつて居つたのであります。尤も時々の試と致しましては、寫眞の方から傳統を破らうとしたのでありまして、畫の遊戲三昧に花鳥畫を試みると云ふやうな時には極めて自由なる考と手法に從つて筆を揮つたことがあるのであります。

併しながら女にしても男にしても人物畫と云ふものはバビロスの繪卷物のやうに繪畫が主となつて宜い場合にも石刻畫に影響された傳統的の畫風に從つて製作をされたのであります。それが爲に藝術家の自由發展と云ふことが制限をされました。併しながら一方から見ますと、傳統の勢力が強かつた爲に純粹の埃及式の畫風と云ふものが長い時期に亘つて能く保存されることが出來たのであります。

然らばどの位古い繪畫が殘つて居るかと申しますと、今から十二三年前西洋の紀元で千九百十三年に亞米利加の發掘隊がサッカラの段階金字塔の附近から或る墳墓を掘り出したのであります。サッカラと云ふのはギゼーの大きなピラミッドのある所に行つて見ますと南の方で稍々西になつた所に澤山のピラミッドが見える、丁度遠山を望むやうに向ふの方にピラミッドの立つて居るのを見るのでありますが、其中に段階になつた一つのピラミッドがある。是は最も古い金字塔の一つでありまして、ギゼーの大きいのよりも恐らく先に出來たものでありませう。其段階金字塔の附近でペルネップと云ふ埃及のメンフィス王の高い役人の墳墓を發掘したのであります。ペルネップと云ふのは高官の名でありますが、それを發掘しまして其墳墓の中の重要なる部分をそつくり紐育の博物館(メトロポリタン・ミュージアム)に運んで再建したのであります。

其墳墓の石壁に線畫の人物が畫いてある。其繪は初に浮彫にする計畫で、朱の線で以て畫き始めたのでありますが、中途或る事情から浮彫にすることが困難になつたに付いて、之に彩色を加へまして繪畫に仕上げて置くことにしたものであります。偶然の事情で浮彫にすることが未遂になつた爲に、實に古い時代の埃及繪畫の面影を我々が今日それに依つて見ることが出來るのであります。此ペルネップと云ふ人は埃及の第五王朝の人でありまして、紀元前二千六百五十年……今日から約四千五百年前に繁榮をした人であります。四千五百年前と云ふと、支那の歴史では黄帝の時が約四千五百年位前ではないかと思ひます。黄帝の臣の史皇と云ふ人が圖畫と云ふものを初めて考へ出したと云ふことが歴史にありますのですが、それがヂャイルスなどの計算しましたところでは四千五百年前位に當つて居ると云ふのでありますから、ペルネップが居つた時が丁度其時分に當る。是はペルネップ自身が生きて居る時に其子と共に建てた墳墓でありまして、其時代に出來たものなのであります。其繪では、此ペルネップが或る座臺の上に居りまして左の腕を前の方に擴げて居る、右の腕を座臺の高い腕掛に休ませて居りまして、威容堂々たる壯夫の姿に畫かれて繪の中で形が最も大きく畫いてあるのであります。其夫人は記錄に依りますと云ふと、王の血統を引いた婦人で、ペルネップと云ふ人よりも門地の高い人であつたさうであります。併し此繪には、夫人と其男子二人とはペルネップの二分の一よりも尙小さい形に畫

いてありまして、前の方に行儀よく坐つてペルネップと相對して居る、家の長者に從順にして居る東洋風の態度が巧に寫されてあるのであります。ペルネップは朝着る着物を着て居りまして鬘や或は附け髭を去つてまだ自然の髮の姿になつて居る。此時分の埃及人の偉い人であると、外に出る時や或は儀式張つて居る時を浮彫などにしたものは皆鬘を冠つて居りまして髭も附け髭である。けれども此場合はさう云ふものをすつかり取つて居りまして、さうして天蓋が座臺の上の方にあつて暑い太陽の光から彼を覆ふて居るところを見ますと云ふと其家庭内の彼の生活狀態を示したものと認めることが出來るのであります。此繪は恐らく繪畫の遺品として最も古いものであらうと思ふ、埃及から出た繪畫の遺品中是が先づ一番古いものでは ないかと思ひます。まだ是から發掘する中からもつと古いものが出て來るかも知れぬが、今日まで發掘したものでは是が一番古いものではなからうかと思ふのであります。今から四千五百年も前のもので兎に角繪として仕上げて繪の形で殘つて居るものは是だけだと思ふのであります。

埃及の繪畫は、石壁の表面或は漆喰の表面に畫いたものと、それから棺槨……木棺が屢々用ゐられて、石棺の中に木の棺があります。其木棺の表面或は内部に色々な繪を畫く、それから木棺の中に木乃伊が這入つて居りまして其木乃伊の面に繪を畫くのであります。是等を合せて假に棺槨畫と言ひますと……棺槨に畫いてある所の繪がありますそれからもう一つはパピロスの卷物に畫いた繪であります。是等三種の材料に畫いた繪が殘つて居るのでありますが、此三種の區別が軈て又三種の人物畫の區別をなして居るのであります。埃及人は生きて居る人間と死んだ人間と神の世界に居る人間とを分けて考へたのであります。さうして死んだ人と云ふものは朽ちて滅却するものとは思はなかつたのであります。例へばカイロである とか或は古いメンフィスの都などは生きて居る人間の都でありまして、生きて居る人は彼處に住んで居る。ところが、カイロからナイル川を渡りまして向ふのギゼーであるとか或はメンフィスの多少西の方にありますサッカラなどは死んだ人の都であります。ネクロ・ポリスでありまして其處は安らかに人が睡つて居る都であつて、ピラミッドであるとか或はマスタバ……ピラミッドの上を切つて梯形になつて居る墳墓梯形臺と假りに譯しても宜いかと思ひますが、金字塔や梯形臺は死んだ人が靜に住まつて居る場所なのであります。埃及人のさう云ふやうな人生觀が女の繪にも表現されまして、古い壁面畫には多く現世の風俗と云ふものを畫いてゐます。漆喰であるとか或は石壁のやうなものには世の中で色々なことを人がして居る風俗を畫いて居る、女王であるとか或は上流の若い女であるとか、稍年代が下りましてシーベスに都のあつた時代の壁畫には、盛裝した女の音樂者、歌ひ姫或は耕作に從事して居る女、夫に伴はれて鳥を捕りに野外に出かけた妻や娘の生活狀態と云ふものを畫いてゐるので

あります。

前に申しましたペルネップよりも時代が稍々遲れて第十二王朝……と云ひますのは、埃及の古い年代は第何代の王朝と云ふ風になつて居るので年代を決めるのが中々むづかしいのであります。或る人は王朝の代を古くし或る人は稍々新しくすると云ふやうな譯で其處に中々議論がありますが、色々なものから見まして當らずと雖も遠からずと云ふところから申しますと、十二王朝と云ふのは紀元前二千百年あたりになる、今から四千年前であります。其時分の矢張り高い官に居つたところのテフチヘテップと云ふ人の墳墓があります。其テフチヘテップと云ふ人の墳墓がエル、ベルシャと云ふ所から發掘されたのであります。エル・ベルシャと云ふのは矢張りナイル川の沿岸でありまして、ベニ、ハザンと云ふ有名な場所がありますがそれの少し南の方に當つて居ります。シーベスから見ると餘程北の方に當つて居りますがカイロから見れば余程南の方に行つて居る所であります。其エル、ベルシャで發掘したテフチヘテップの墳墓の内部に埃及人の日常生活の狀態を寫しました壁畫が多數に發見されたのであります。支那の舜の居つた時代は今から約四千年前位であらうと云ふのでありますが、舜の妹の嫘が畫嫘と謂はれて、繪畫と云ふものを始めたのであると云ふ傳說があるのであります。前の史皇のは恐らく圖畫でありまして、英語で言へば Drawing であつて、舜の妹のは繪畫 Painting である。其繪畫を始めたと云ふことがありますが、其時代が本當に四千年前であつたとすれば、今エル、ベルシャで發見した墳墓と云ふのは丁度其時に當るのであります。

其壁面の中に此テフチヘテップの愛孃の美しい姿が描かれてあるのであります。横向の立像でありまして、胸部は半ば裸になつて居る卽ち半裸でありまして、兩腕は赤裸の儘で、左の手に蓮の花の莖を握つて、半開の花を自分の顏の前に近寄せて其芳香を嗅いで居る圖であります。斯う云ふやうな圖柄は埃及の古い浮彫に折々出て來る圖柄なのであります。若い女がロートスの花の香を嗅いで居ると云ふのは浮彫の方には度々現れる圖でありますが、是は繪に現れて居る。埃及の繪では通例女人の肉身と云ふものは少し黄を帶びて居る色に塗つてある。パピロスに畫いてあるものの中にはほんのり肉色になつて居るのもあるのでありますが、多くは淡い黄色で肉身が塗つてあるのであります。ところが今申しました壁畫の女人の肉身は褐色でありまして、赤味を帶びた褐色に塗られてあるのであります。リボンの鉢卷を後頭部で蝶形に結び長く垂れて居る、其リボンは綠の葉と青の蕾を持つて居るところの睡蓮の花を以て飾られてある而して丁度袴形になつて居る胸衣を著けてゐるのでありますが、其胸衣の間から横向に乳房が膨らんで出て居りまして可愛らしい乳首が其處に示されてあるのであります。顏は横向になつて居りますが胸のところは正面になつて居りまして、さうして乳房が片方だけ側面向き

に畫いてある。腹部は白衣に包まれて居る。V字形の綴織と覺ほしき胸飾りを襟から掛けて居りまして、其胸飾りの垂れて終る所には美しい數多の寶玉が下がつて居るのであります。さうして手頸の部分にも美しい腕輪が嵌められてある。眉は隨分長く畫いてありまして眼は大きい。鼻筋が通つて居つて、唇は何れかと云へば稍々横に長く、心の鋭い趣を示して居るのであります。頤は稍短い。大體に於て氣品の高い趣が發露して居る姿なのであります。

上に擧げました色々な時代の女人畫或は人體畫の圖取に付いて注意すべきことがあるのであります。それは身體の各部が同一視點から見た如く畫いてないことであります。例へば頭は側面圖で横から見た姿になつて居りますが、胸の部分は前面圖で前から見たやうな形に畫いてある。然るに乳房だけは横向になつて居る。横から見たやうに前面圖の横の方に乳房が畫いてあつて、それは片方の乳房だけであつて他方の乳房と云ふものは畫いてないのであります。正面であるけれども乳房だけは横向になつてさうして一つだけしか畫いてない。歐羅巴の近代の批評家は言ふのであります、埃及の畫家と云ふものは人體の各局部を能く觀察して其形を寫實的に明白に畫く技巧を手に入れて居るが、人體と云ふものを全體として見た姿に畫く法を知らなかつた顔は横向、胸は正面向、足は又横向となつて、統一調和などと云ふことは埃及の畫家は一向構はない、一つ點から見たやうにからだを畫くと云ふことは埃及の畫家はやらなかつた、各部を結び付けるだけである、斯う云ふ風に評して居るのであります。それは客觀的の寫實の見地からの評であります、實物を寫すと云ふ點から言へば其通りでありますが、併しながら一面から見ますと云ふと、埃及の古代の畫家は考を現すのを主として居りまして、心に考へて居るところから人體を畫くのでありますから、客觀的描寫になると云ふことを必ずしも狙つて居らなかつたやうに認められるゝのであります。主觀の表現であると云ふ風に繪を見ると、前申したやうな畫き方をしてもそれで宜いのであると云ふ風に埃及の畫家は考へて居つたのではないかと解釋されるのであります。

人物の後に他の人物や動物が居ることを示すのに、人物の上のところにそれを畫くのであります。前に人物が居りますと其後の方に居る者を空中に重ねて畫く、それから机の上に幾つかの品物が置いてありますと、埃及の畫家は下に机を畫いて上の方にコップを畫く片方に瓶を畫く、さう云ふ風に空中に上に畫いて行く。それから主要なる人物を大きく畫きまして副たる人物を小さく畫くと云ふことをするのであります。是等は何れも表現的の畫き方でありまして、考へて居るところを繪に表現して行くと云ふので、物を忠實に客觀的に描寫すると云ふのとは少し違ふのであります。尤も能く考へて見ますと、遠いものを上の方に畫くと云ふのは近代の畫でもやることで、唯近代のは聯絡して居

るのであります。遠いものは上にあるのですが近い所にあるものとの間に聯絡がありまして、さうして遠近法が用ゐられて畫かれてある。それで、見ると云ふと遠くにあるやうに見える。實は上に畫いてあるけれどもそれが遠くにあるやうに見える。埃及の畫には遠近法や或は遠見法と云ふものは用ゐられてゐないのであります。或はさう云ふものがあると云ふことを論ずる人も出て來て居りますけれども、先づ大體はさう云ふものは餘りない。で寧ろ事實を平面的に畫くと云ふ畫き方でありまして餘程それは東洋式なのであります。それから主要人物を大きく畫くと云ふのは、是は古代希臘のスパルタあたりから出る浮彫のやうなものも矢張り主要人物が大きく副人物は小さく彫んである。日本にある阿佐太子が畫いたと傳へられてあるあの聖德太子の像も矢張り太子だけ大きく畫いてありまして、他の二人の人物は小さく畫いてある。さう云ふ譯でありますから、此點は埃及の古い繪が他の國から出た繪と著しく懸隔してゐると云ふ譯でもない。

更に時代が下りまして、エル、アマルナと云ふ所……エル、ベルシャのすぐ南の方の附近地でありますが、其處から發掘された壁畫には、全然裸體の若い姉妹の相互ひに愛して居るところのものを畫いたものがあります。是は十八王朝にアメノフィス四世と云ふ王がありましたがそれの王女であります。紀元前千四百年位前のものでありまして卽ち今から約三千三百年前のものであります。珠數繋きの寶玉の襟飾りを付けて居りまして、それから腕輪が嵌まつて居るだけで他は何等の裝をもして居らない、全く裸なのであります。腰の部分にも何も纏つて居らない、素裸なのであります。で肉身は寧ろ寫實的に畫いてある。女人の全裸體畫の最も古いものは恐らく是ではなからうかと思ふ。前に申しましたのは半裸でありまして衣服を纏ふて居る部分があるけれども是は衣服と云ふものは少しもない。唯腕輪と首輪だけであります。何れかと云ふと少し痞せ形の方であります。頭は余程細く畫いてありまして頭部は比較的に大きく畫いてある。唯からだの形は寫實的に能く畫いてある。勿論線畫であります。線で畫いてありますが丸味が余程旨く出て居る。

是等の古い時代の女人の姿に就て前からずつと見て參りました所を總括して申しますれば優しいところもあります、又敏いところもあります。が併し艶媚の態と云ふものは現れて居らない。卽ち玆に擧げましたのは、王女であるとか或は高貴の姫君であるとか云ふやうな婦人でありまして、貴むべき趣を現すのが主であります、狎れ易い趣を現すと云ふことは恐らくは畫家が目的としたところでなかつたかも知れないのであります。優しいさうして賢い鋭い相でありますが艶媚の態と云ふものは現れて居らない。

今申しましたアメノフィス第四世と云ふのは都をシーベスからエル、アマルナに移した人でありまして、エル、アマルナと云ふのは其時分に田舍だつたのであります。此エル、ア

マルナにシーベスから都を移した。さうするとエル、アマルナの藝術家はシーベスに行はれました藝術の型から脱しまして却て古いところ即ち十二王朝時代あたりに還らうとしたのであります。それで十二王朝あたりとエル、アマルナの時代の作と云ふものは、個々の人物を寫すことは共に稚拙でありまして、餘り巧でないけれども、夫れを集團に纒めることが巧でありまして、全體の作の上に活躍があり生命が溢れて居るのであります。併しエル、アマルナの作の方は十二王朝の時代よりも進んで居りまして、構圖も一層巧妙になつて居るのであります。此時代のエル、アマルナの繪畫或は浮彫には宮廷風俗を遠虚なしに示したものがあるので餘程興味があるのであります。

例へば、或る繪に女王が王の鼻先の所に香を嗅げと云はんばかりに花束を突き出して、それから他の手にまだ澤山の花を持つて居つて一つ〳〵善い香を王に嗅がせやうとして出して居るところの餘程面白い趣を現した、大變に能く其氣分の現れて居るものがあるのであります。或は王が其家族の者と共に食卓に著きまして肉の付いて居る骨をしやぶつて居るところが畫いてある。隨分有の儘のところを畫いたものであります。それからもう一つは、王と女王とが相對して椅子に腰を掛けて居りまして、女王の膝の上に其娘の子が抱かれて居る。それから王はもう一人の子を兩手に捧げて居つて、王が斯く捧げて居るところの子と女王の膝の上に居る子とが相互ひに喜び騷いで居る狀を現して居るものがあるのであります。それから或る繪では女王が王の膝の上に愛くるしさうに寄り掛つて居りまして其前の所に子供が相互ひに嬉々として戯れて居るところがあるのであります。或は王が其自分の寵臣を御殿に呼びまして、黄金の首飾りを褒美に與へるところを王の小さい王女等が見て喜んで面白い身振をして相互ひに戯れて居る、寵臣の後の方で其家來が喜んで居るところを示したものなどがあるのであります。斯う云ふ風に宮廷の私の生活と云ふものを狎れ〳〵しく示したものは、シーベス時代の藝術家は之を畫くことを試みなかつたのでありまして、後の世には稍々似たやうな題材が取扱はれて居つてももつと莊嚴な形にしてそれを示して居るのであります。さう云ふ風にエル、アマルナの藝術家は寫實に依つて新機軸を出した。でシーベスの藝術家よりも自然を一層忠實に寫したところに其特色があるのであります。是等に畫かれてあるところから見ますと埃及の上流の家庭生活と云ふものは中々親愛の趣がありまして溫か味のあつたと云ふことが能く分るのであります。顧愷之の女史司箴の卷物に王の一族團欒の場面を畫いたところがございますが、あれなどに較べて見ると云ふと此の埃及の宮廷生活を畫いたものの方が親愛の情滴る如く一層さう云ふやうな趣が能く現れて居るのであります。

此時代と略々同じ時代に裸女の曲藝妾の繪などが出來て居るのであります。踊り女

が立つた儘で裸でありまして、それは腰部に僅かばかりの布を纏つて居るのであります、立つた儘段々後の方に反り返りまして遂に角兵衛獅子のやうに手を後に突いてしまふのであります、さうして頭を倒にしまして、房々とした綠の黑髮を以て地面を拂ふところの所作をやつて居る。丁度石橋獅子舞とか石橋髮洗ひとか云ふやうな……ああ云ふ風なところを裸の女が踊つて居る狀を巧妙に描寫しまして、隨分大膽に肉身の活躍を人の眼前に露出して居るのでございます。今日の巴里のモンマートルの劇場に出る女曲藝師も及びも能はない踊り方をして居るところを畫いてある。尤も旣に第六王朝……第六王朝と云ふのは紀元前二千四五百年でありまして今から四千三四百年前に當りますが、丁度サッカラの段階ピラミッド以外のピラミッドが多く建てられた時分、是は浮彫でありますが、浮彫に若い女が揃つて高蹴りの踊り卽ちハイ・キックと云ふのを豪い勢で踊つて居るところを表現して居る。それは女が右の足で立つて居りまして、胴や頭を後の方に反らせて左の足で天を蹴るのであります。其左の足の膝から先が頭から上に出て居る、片方の足で餘程高く天を蹴るところの姿勢でありまして、全身が緊張して、全筋肉が働いて激烈な踊り方をして居る、若い女が幾人も揃つてさう云ふ踊り方をするところを現して居る。斯う云ふ女のハイ・キック卽ち高蹴りの踊りと云ふのは巴里や紐育の下町では現代に於て盛んにやつて頗る挑發的の踊り方でありまして、歐米の若い女のお轉婆の極端な動作の代表のやうに見られて居るのでありますが、實は四千三四百年前の埃及美人が盛んに之をやつたのであります。浮彫になつて居るところを見てさへ中々當るべからざる勢でありまして、ああ云ふ風な踊り方は矢張り東洋が元なのであります。埃及は氣分がまるで東洋でありますが、あれが元で段々現代の歐羅巴にああ云ふことが傳はつて行つたものであります。

茲で一寸埃及から出る必要があります、埃及に金字塔が盛んに建てられた頃はエージアン海のクリート島のミノアン文明の丁度前期に當つて居る。ミノアン文明と云ふのは前期は紀元前三千年から二千二百年位の間でありまして隨分古いものなのであります。此クリート島に於けるミノアンの文明が精華を放つた時は其中期でありまして、埃及で云ひますれば第十王朝からして第十八王朝に相當して居るのであります。卽ち紀元前二千二百年から千六百年の間であります。其時代にクリートに出來ました壁畫に現れて居る丈の高い女の姿があるのでありますが、長身の女人が實に活潑に躍動して居るのでありまして、希臘のホーマーなどの傳說に出て來るところのアマゾン女傑の傳說に材料を供給したのはクリートの女であつたらうと云ふ說があるのであります。或る人の考では、クリートは埃及の古代とホーマーの描寫したトロヤ時代とを結び付ける踏み石の役目を務めた所である。兎に角此ミノアン文明がクリートに花を咲かせた頃の

女の勢と云ふものは實に大したものであつたらしいのです。それから後にスパルタから偉い女が出て來たのですが、クリートの女の勢に較べると云ふと迚も及ばなかつた。

それから稍々遲れまして後期ミノアン時代卽ち紀元前千六百年から千百年の間に出たもので漆喰繪に美人や歌妓を畫いたものがあるのであります。髮の結ひ方など頗る自己肯定的でありまして中々豪い結ひ方をして居る。唇は眞紅に色付けられて、衣裳には隨分派手な色を使ひまして、青地に赤と黑の棒縞を添えたものや、黃地に青と赤の緣を取つたものなどがありまして、隨分思ひ切つた派手な裝をして居るのであります。眼は大きく開いて、腕や足の姿勢も青春の氣に充ちて、其時代の女人と云ふものが世の中を濶歩した有樣が想像されるのであります。尤も此頃は女の奴隷と云ふものがありまして、貴人であるとか或は富豪と云ふものは女の奴隷を所有して、其中に美人があり音樂者があり歌ひ姬などがあつたのであります。或はさう云ふ類の者を畫いたのかも知れないのでありますが、奴隷と云ふのは男の奴隷も隨分澤山あつたので、矢張り其時分の風俗であつたのです。

此クリートの繪を作の上から見ますと是は毛筆を自在に使つて居るのであります。肉線を用ゐまして或は沒骨風に畫いたものもある墨色の濃淡もありますし花卉動物などになりますと日本畫に餘程似て居ります。古い陶器の面に魚類を畫いたものに達者に筆を使つたものがあるのであります、人物も矢張り肉線を達者に使用して畫いて居る。埃及の方の繪は毛筆を使つたのでなくて、ナイル河の葦を斜に切りまして、さうして、硯に墨を溶いてそれを附けて畫いたやうな、卽ち硬筆を使つて畫いたやうな線である。人物に毛筆を使つたと思はれるもの……是は確に毛筆だなと思はれるやうなものが少い。どうも硬筆で畫いてあるやうである。色彩は毛筆を用ゐたらしいのであります、併し毛筆の殘つて居るものはない。ナイル河の葦を切つて、さうしてペンのやうに眞中を割りまして筆にしたものはブリティーッシュミュージアムに保存してあります……硯も保存してある。ところがクリートの方は毛筆を盛んに使つて居るのであります。概して繪が柔かに溫か味がありまして、クリートはああ云ふ島でありますから幾らか風土の影響があつて柔い溫かいやうな心持がそこらから自然に來て居るのであるかとも思はれるのであります。蛸・鯖・飛の魚などは最も巧に畫いてある。尤も埃及の方にも花鳥畫を畫いたものには之に似て居るものが可なり古いところにあるのであります。日本で云ひますと四條派などの花鳥と殆ど同じ畫き方をしたものが埃及にもある。畫家が繪三昧に少しも拘束を受けないで畫いたものは矢張りクリートの花鳥畫と同じやうに四條派……圓山派よりも寧ろ四條派のやうな畫き方をして隨分面白い畫き方をして居る。それは毛筆を使つたらうと思はれるのであります。クリートの繪と云ふものは、是は近

頃になつてクリートに他國人が這入ることが來るやうになつたものですから段々分つて來たのでありますが、クリートの品物も段々探究されて、歐羅巴にも來て居るが殊に亞米利加に餘計來て居る。それで段々分つて來たのであります。

それから棺槨の上に畫いてある女人畫でありますが、埃及の人物畫は鐵線描で輪廓が畫かれてあるのでありますが、刻畫と云ふものに余程影響されたものですからして、或る場合には餘程繪が形式化し圖案化して居る。さう云ふやうな形式化し圖案化した畫風を著く示したのは棺槨の內外或は木乃伊の表面に畫いてある人の姿であります。勿論男の顏もあるのでありますが、亡くなつた人を畫いたものであるが、死人の顏や姿を畫いてゐるのでは無い、生きた顏や姿であるが夫れが靜に落ち付いて居る趣を以て畫かれてある。で此棺槨畫或は木乃伊の繪は壁畫や碑面畫と異つて居る。夫れは顏が何れも正面向になつて居る事でありますが横向に畫いてない大抵正面に向いて居る。是が紀元後百十年あたりのものになつて來ますと四分の三位の僅かに横向にしたものがあるのでありますが、概して言ふと、全く横に畫いてあると云ふやうなものはない。それで此類の繪は紀元前千二百年頃から紀元後百五十年頃に亘つて色々な時代のものが出來て居るのであります。死者の姿に對しては埃及人は一種の羨望の情を有してゐたのである、夫れを藝術化して富者が人々を宴會に招き食事の終る頃に棺の雛形の中に死者の横つてゐる置物を持ち來り挨拶をして「此人物に眼を投して御覽なさい。死後にはあなた方も此様におなりになる、さあ酒を御飲み下さい。お喜びなさい」と言ふ、死者に對し一種の心地善い感じを有つて居るた事がこれで解ります。

棺の內部に畫かれた女の姿に、全然裸體で兩腕を頭の上に伸ばしてそれから兩足も眞直に伸ばして仰向に寢て居る圖がある。左右の乳房が丸く膨れまして……是は兩方の乳房が畫いてある、臍の周圍のところも心もち丸く膨れてそれから頭髮や全身が稍々圖案化されて形式上大變に心持が善いやうな姿に畫かれてある。さう云ふのには色彩は極く淡白に付けてあります。棺の表面や木乃伊の表面の方の畫は色彩も美しく、衣紋も裝飾化されてゐます。紀元前千二百年頃のものは多くは顏面と頸のあたり丈けが描かれてあつて手足の如きは裏まれてあります。其頃のものは顏面に個人的特徵は現はれてゐないが、後世のものは顏面が寫實的になつてゐます。似顏繪を薄い板にテムペラや蠟畫法で描き、之を木乃伊の頭部に附加する習慣は古い時代から行はれてゐました。下つてヘレニスチック(希臘文化影響時代には漆喰(ストッコー)の似顏面や、板に畫いた似顏面を木乃伊に着けました。生々した表情のものがあつて、往々生前に似顏を畫かせ、之を室內に掛け額として、其人の死した後之を木乃伊に加へ、或は之を模寫して木乃伊に附けました。是等肖像畫中に勿論女のも男のもありますが、顏貌の特徵をよく捉へ、樣式的で無く、

硬筆か色彩刷毛を自由自在に用ひて畫いてゐます。蠟畫法によりたるものは褪色せないで、彩色の鮮明に保存されてゐるものがあります。紀元後二世紀に描かれたものに外面のものでも、腕や足が畫かれ、胸の衣紋の間から乳房が露はれたものなどがあります。時には面相や胸部の肉の部分を金泥を以て塗り其上に線で描いたものがあります。是等には個人的特殊の相を示したものもありまして、或る作は最早希臘羅馬の畫風の影響を受けた樣式である事が明に認められます。次にもう一つ擧げますが、紀元前百五十年頃に出來たもので、棺の內部にヌットと云ふ女神を畫いたものがある。是はシーベスから出たものでありますが、此女神は胸の部分と上肢が裸體になつて居る。首輪腕輪それから手頸の輪を以て裝飾されて、頭髮にはリボンを鉢卷形に結んで、腹部から足に至るまで裳を着けて居る、赤地に白と綠の大いなる網模樣の裳を着けまして盛裝した姿があつさり美しく畫かれてゐる。周圍に天の十二宮の圖が描かれ又「日の船」「月の船」が描かれ、凡べて線畫でありまして左右が均齊に畫かれて、正面向で深みのある美しい表情をして居るのであります。殊に裳の色彩の調和が美しい。此繪には隈取、陰影などは少しも施してない。紀元後百十年あたりのものは希臘や羅馬の影響を受けて棺槨畫まで大分隈取をしたものが出て來るのでありますが、是は純粹の線畫でありまして少しも羅馬風の影響が這入つて居らない。

古代の埃及人は死んだ人を追懷し或は記念する丈では滿足せなかつた。其追懷を繪畫に現實化するほかに死んだ夫婦を並べて彫刻にしたものがあるのであります。彫刻でありますけれども面はすつかり繪で畫いてあるのでありまして繪畫を彫刻に結び付けたやうなものでありますが、同一石塊を以て刻んだもので、夫婦が行儀よく椅子に腰を掛けて並んで居る像を、或は半肉彫にしたり或は丸彫にして作つたものが今日に可なり多く殘つて居るのであります。其種類の一對像の作に第三王朝か第四王朝の初に出來たものがあるのであります。それを茲に申上げて置きたいと思ふのであります。それはラホテップと云ふ……是は王ではないのでありますけれども矢張り王族の一人であります。ラホテップと其妃のネッフェルトの像である。是はギゼーの大きいピラミッドよりもう少し前の作だらうと推定されて居るのであります。ギゼーのピラミッドは第四王朝の時に出來たやうでありますが、第三王朝は紀元前二千九百八十年頃でありまして、從つてネッフェルトの像は今から四千七八百年前のものであります。中々古い五千年に垂として居るところの像であります。さう云ふやうな早い時代にどうしてあんなデッサンの正確なさうして藝術の香の高い作品が出來たかと驚かさるる品物であります。尤も第四王朝に於ては彫像と云ふものは他にも優秀なものが出て居りますから、第三王朝の時に斯う云ふ良いものが出ると云ふことは、聯關して考へれば餘り不思議でもないのであ

りますが、ネッフェルトは女人の彫像として高古に卓絶して居るのみならず、是は後世の如何なる女人藝術にも匹敵して敢て後れを取らない作品であります。

それは白衣の姿でありますが、顏面や手足の皮膚が稍々黃色を帶びた肉色に著色されてゐる。首飾りや鬘のリボンの模樣は美しく彩られ居りまして、それから乳房手頸が薄い衣の中に透いて見える。そこらのところは多少色を以て彫刻を助けて居るのであります。肉身の恰好は如何にも能く整つて而かも瘠せて居らない。面貌が遙か後世に出て來る希臘の美人とも違つて居る、或は印度式の美人とも違つて獨特なものであります。美しいことは言ふ迄もないのですが實に想の幽玄な幾分憂ひ顏の、さうして高貴な、さうして久遠の生命を體得して居る趣のものであります。殊に其大きな眼に無限の表情がありまして眉は横に長く極く秀麗であります。彫刻の表面に畫かれてあるので全體が繪畫の實現したのものの如くに思はれる姿のものであります。或は彫刻が繪畫化した如くにも見えるのであります。此美人像は埃及の國土が產出した東洋美人の標式を最も能く表現したものだと言ふことが出來ると思ふのであります。

此以後多く埃及に出た男女の一對の像は夫婦と云ふ考を示してゐるに相違ないが、又父母と云ふ考も基になつてゐるのであります。さう云ふ藝術に現れてゐる妻なり母なりは實に眞面目の顏貌と姿勢とを示し、身に衣紋を正しく纏ひ、或は胸部の裸體である場合にも腰以下に折目正しい裳を纏ひ、風采が如何にも嚴肅であつて子孫の禮拜の對象として耻しく無い態度を現してゐます。埃及の女は妻として貴はれ、母として敬はれたのみならず、女が妻とし母としての尊嚴、品格を自覺してゐた事が如上の繪畫や彫刻の上から觀察されます。而して夫婦は相互から見て同格であり、父母は又相互から見るも、兒子から見るも全く同格である事が是等の作品に表現されてゐます。

最後にバビロス繪卷の女人畫に就て述べますと、バビロスの繪卷物は人間が神の世界に移り神の德を賞讃したりそれから神の審判を受けたり神性を領得したりする狀況を畫いたものであります。卽ち未來記であります。繪と繪との間に詞書が挾まれて、日本の繪卷物と形式は似て居ります。古いバビロスは象形文字で詞書が書いてある。或るものは繪の下に詞書が書いてある。恰も過去現在因果經繪卷の如き形に出來たものもあるのであります。詞書だけのは記錄として色々なことを書いたもので甚だ古いものがありますが、繪卷物は紀元前二千六百年卽ち今から四千五百年前位からして作られまして、隨分長い時代に亘つて方々で作られたものであります。其遺品は比較的に多い。新しいものはトレミー時代の終り卽ち紀元前百年位に出來たものもある。倫敦のブリティッシュ・ミュージアムの所藏のものは其中の逸品でありまして完全に保存されてある。今から約三千六百年前に出たアニの繪卷物と云ふのがあります。アニと云ふのは人の

名でありますが、其アニと云ふ人の夫人にトゥトゥと云ふのがありまして、其トゥトゥ夫人が神の國に在つて其夫のアニと共に天のナイル河の水を飲んで居るところを畫いたものがある。或は、今日の遊戯で言へば將棋を指すと言つて宜いか或は碁を打つと言つて宜いか、ああ云ふやうな遊戯をやつて居るところを畫いた場面などがあるのであります。其樣子は能舞臺に出演する人物の態度に餘程似て居りまして、殊に天のナイル河の流れの水を掬つて飲むあたりは頗る悠長で、手を顔の前方に出しまして其手にナイル河から掬はれた水が二本ばかりの線で畫いてありましてそれが水色に塗つてある。トゥトゥ夫人も夫のアニも共に二人揃つて水を飲んで居ると云ふことを暗示するやうな、丁度能樂に出て來るやうな態度に畫いてあるのであります。

それから大英博物館の所藏の繪卷物でもう少し時代の遲れたもので、女人畫が主として畫いてあるのとそれから繪畫を主としてそれに幾らか詞書を添えた點で興味の多いものが二つあります。是は詞書を重に書きさうして或る所に挿繪をすると云ふのでなくして、繪が主になりまして面白いところに少しづつ詞書を添へたのでありまして、丁度日本の繪卷物のやうな作り方をして、それは詰り經文を表すとか或は宗教的の或る考を表すと云ふのが主でなくて繪を畫くのが主なのであります。一つはヒューネッフェルの繪卷と云ひそれからもう一つはアンハイの繪卷と云ふ二つであります。是は大英博物館で見ることの出來る品物でありますバビロスの着色畫として最も美いものであります。バビロスと云ふのは一寸見たところでは芭蕉布見たやうな……あれよりもつと細い纖維で織られてあるやうな風に見える……一寸粗い絹のやうに見える。其上に繪が畫いてある。繪卷物の中で藝術的に價値の最も多いものは此二つなのであります。ヒューネッフェルの繪卷とアンハイの繪卷と此二つは埃及の繪畫の醇の醇なるものでありまして、畫いてあるのは、アンハイのは全く女でありますが、ヒューネッフェルの方は夫婦であります。繪が主に女人を題にして畫いてあります。埃及の繪畫中の是が一番美しい花であらうと認められるのであります。

ヒューネッフェルと云ふのはセッティーと云ふ王の書記官でありまして、是は紀元前千三百七十年頃の人でありますが、此人が其妻のナシャと云ふ婦人と共に神の國に行く事情を畫いたものがヒューネッフェルの繪卷物と云ふのであります。今から丁度三千二百年前の人であつた。アンハイの繪卷と云ふのは紀元前千百年今から三千年前に居つたアンハイと云ふシーベスの神社に仕へて居つた高貴の女神官であります。其女神官の未來記。此人は歌の大變に上手な歌ひ手です、神の德を贊頌することに秀た人であります。此二つの繪卷物は約二百七十年を隔てて出たのでありますが、其描法には餘り大いなる相違は認められないのであります。唯アンハイの方の畫家は人體美に覺醒しまして、稍

々大膽に此美を表現した點に於てはヒューネッフェルの畫家よりも餘程進んで居るところが見られる。此二つの繪卷物には、神の國の審判官の前に導かれたり或はオシリスの神に禮拜をしたり或は祭壇の前に神鈴を振つて頌讃の辭を唱へる如き、何れも莊嚴な場面に立つ女の姿か畫かれてあるのでありまして、從つてナシャ夫人もアンハイも氣品の高い盛裝をしまして、房々として居る黑髮の上にはロートスの花冠を着けて、片手には神鈴を持ち或は蔓の付いて居る草を腕の一部に掛けて居る。丁度天衣が掛つて居るやうな工合に蔓の草が掛つて居る。ナシャの方は白衣を着けて居りまして、アンハイは淡紅の紗の着物を着て居る。ナシャの方は衣裳の裏に肉身のあることを巧に暗示して居るのであります。唯衣裳は白い着物で胡粉を塗つてありますから中にある肉身を旨く包んで居りまして、肉身のあると云ふことは大變に旨く暗示されて居るのでありますけれどもさう露骨に肉身を表すと云ふやうなことにはなつて居らない。肉身の見えるのを白い着物が遮つて居ると云ふやうな姿にして畫いてあるのである。然るにアンハイの方は時代が稍々下つて居る爲か、肉身の全裸體が美しく透いて見えるのであります。流麗なる線を以て畫いた裸體を輕羅が蔽ふて居る。極く薄い紗の着物が蔽ふて居ると云ふことを示す爲に輪廓線が加へてあるに過ぎない。全く裸體を線で書きまして其上に紗の着物を着て居ると云ふことを唯輪廓線で以て暗示してゐる、餘程巧にそこの工合が出て居る着物を着て居るがすつかり肉體が透いて見える。勿論陰影や隈取などは其痕跡もないのでありますが、描線が旨く使つてあるものですから肉身の丸みと柔かみとを巧に表現しまして、其當時の畫家の伎倆が中々尋常のものでなかつたと云ふことを示して居るのであります。顏は何れも側面圖であります。さうして淡紅色に着色されてある。體軀の恰好の輪廓は寫實的であります。アンハイはナシャに較べると云ふと丈がすらりと高くなりまして何となく長閑な氣分が示されて居る。で兩方ともに身體の細かい部分は表現的暗示的であつて餘り多くを畫かないのであります。簡潔省略的な筆を使つて居る。ナシャの方は審判の場に臨むにもオシリスの神の前から退下するにも夫に何時も伴つて居る。而かも夫婦が同格の態度で女としての獨立の起居振舞を能く示して居るのであります。アンハイの方は單身神の國に這入つて行くのでありまして、ナシャに較べると云ふと活動の場面も多いし顏面の表情も著しく、トットと云ふ智慧の神がアンハイの手頸を握つてアンハイをオシリスの神の前に導く光景などは實に興味の深いものでありまして、アンハイの顏面姿勢を見ますと云ふと女の優しい表情が豐に溢れて居る。頰のところに紅を塗つてある。是はナシャの畫家は試みなかつた手法である。ナシャの姿の嚴かなるに對比するとアンハイの姿は稍々艶なる味がありまして、人の心を動して已まない趣がある。前に擧げましたネッフェルトの像に較べますと、アンハイのは約一千八

九百年後に畫かれたのであります。ネッフェルトのは彫像でありますが人を魅する力はアンハイの方が優つて性的分子をより濃厚に表現して居るのであります。此點はアンハイの方が現代に多少近付いて來て居るのですが、而かも古代埃及の上流の女の特徴であるところの威容と云ふものが其爲に少しも犧牲に供せられて居らないのは注意すべきことであります。

埃及の文物は希臘とは違つて東洋式であるのであります。足一度亞弗利加に這入つて埃及の土地を踏み又時代々々の藝術を目擊しますと云ふと、我々東洋人と考や氣分が全く契合するところがありまして、何となく自分の故郷に這入つたやうな氣持がするのであります。併し東洋式の女人畫と云ふものは三四千年前の作に於て最も能く之を見ることが出來るのでありまして、時代が下つてアレキサンドリアの開かるる前から段々希臘の文化に影響されまして、其後羅馬の干渉を受ける頃は、繪畫の樣式や畫家の理想とする女人姿も變つて、ポンペイ發掘の壁畫にある女の姿などと段々似るやうになつて變つて來たのであります。線は保存されましても陰影のある肖像畫風のものが畫かれるやうになつて來たのであります。アレキサンドル大帝の時(紀元前三三二—三二三年に)アレキサンドリアに幾多の畫家が出たのでありますが、其畫くところを見ると云ふと希臘の神話や歴史が屢々畫題になつて居る。此アレキサンドリア時代の畫家の中でアンティフィロースと云ふ畫家がある。肖像畫や風俗畫を畫き、又女の機織の圖を畫いたものがある。此畫家は顔に焚き火の光が映じて居るところなどを巧に畫きまして明暗を畫き分けるのが上手であつた。それから踊り子の有らゆる變化を畫いた、此人が態々伊太利に渡つて行きましてポンペイの壁畫にそれを試みたことがあるのであります。だからポンペイの壁畫から見てアンティフィロースの畫風を推知する事が出來るのでございます、斯う云ふ風に埃及の女人畫が西洋の女人畫の系統に屬せしむるを得るやうなものに變つて來たのでございます。それでありますから埃及の東洋式の描線畫の女人畫と云ふものは紀元前四五百年卽ち今から二千三四百年前の頃に於て其終末の段階に達したと見て可いと思はれるのであります

昭和五年四月二十日印刷
昭和五年四月二十三日發行

【定價金參拾錢】

帝室博物館

印刷者　今井彦太郎
東京市深川區古石場町六番地

印刷所　今井印刷所
東京市深川區古石場町六番地

製本カード　　第二部製本係

14.5 函	139 號	12 年 12 月 20 日

（書名並報告、叢書名）

東京帝室博物館講演集 第五集

（卷、年）　（號）　1（冊）

（備　考）

14.5
139

終